

昔、姉がまだ小学生の頃、担任の先生に「ロールモデルを作りなさい」と言われていました。ロールモデルとは、物事への取り組みを見習いたい人、自分が理想とする人のことを言うそうです。私には憧れている病院の先生がいます。医者としてはもちろん、先生の人柄に憧れています。私のロールモデルはその先生かもしれません。

私は右耳に小耳症という障害を持って生まれてきました。小耳症とは、生まれつき耳の形が完全ではない疾患のことです。大きさが少し小さいだけだったり形がやや不完全だったりするものから、ほとんど耳がない状態まで程度は様々です。発症の確率は50000〜60000人に一人とされている比較的稀な疾患です。その小耳症を持つ子供たちに、形成手術で新しい耳を作ってあげる「耳のお父さん」とも呼ばれるその人こそが私の憧れる四ツ柳高敏先生です。先生は札幌医科大学附属病院のドクターです。

先生との出会いは私がまだ小学二年生の時で、あまりはつきりしたことは覚えていません。しかし、私も母も印象的だった先生の言葉があります。小耳症の手術は、肋軟骨で耳介フレームを作るため、骨が成長する小学五年生以降とされています。当時はまだ手術を受けられる年齢ではありませんでしたが、先生は「手術を受けるかは本人が決めるべきだから、もし本当にみんなと同じような耳が欲しくなったらまたいつでもおいで。」と言ってくれました。そして、親に手術について詳しく話をしたあと、ま

だ幼い私にはきちんと理解できるように、「ひとみちゃんの右耳はほかのみんなと違うけど、実は右耳はひとみちゃんが持っているんだよ。右の胸のところに隠してあって、それを先生がひとみちゃんが寝ている間に取って右耳として付けておいてあげることから。ひとみちゃんはまだ寝て、起きたらみんなと同じ耳が付いているから。」と、先生は医者目線ではなく、手術を受ける子供目線で手術に対する恐怖を一ミリも感じさせない説明をしてくれました。

しばらくの間、手術のことは視野に入れずに過ごしていました。しかし時がたつにつれ、耳を出せる自由な髪型をしたいと思うようになりました。そこで、中学一年生の夏休みに、一回目の手術(小耳症の手術は二回に分けて行われます。)を受けました。そして、中学二年生となった今年の夏休みに二回目の手術を受け、ようやく夢だったみんなと同じ耳を手に入れることができました。私は、今まで小耳症である右耳が当たり前だったので、新しい耳を手に入れて、みんなと同じになれたうれしさで胸がいっぱいになりました。

他にも小耳症の手術をする先生はたくさんいるのに、なぜ両親が遠い北海道の病院に私を連れて行ったかという点、ある日母が、たまたまテレビのドキュメンタリーに出ていた先生を見つけたからです。母はテレビに映った先生を見てすぐに、「この先生に手術をしていただきたい」と思ったそうです。なぜ母がそう思ったのかは、今になって分かります。先生は腕がいいのももちろん、子供たちを自然と笑顔にできる、耳のお父さんと呼ばれるのも納得できるような、信頼のおける存在だからだと私は思います。「耳を作った時に一緒にサポテンの種を

埋めておいたから楽しみにしてて。」先生はこのような冗談を私たち患者にたくさん言ってくれていました。これは初めて出会った時から変わらないことで、幼いころはただ面白くて笑っているだけでしたが、今考えれば少しでも不安を和らげるために言ってくれているのだろうと感じています。

私は、耳を作ることによって、患者の笑顔と未来を照らせるような先生がすごいと思います。そして、その患者の幸せを自分の幸せとして受け止めてくれることがすごくうれしいです。

今の私は先生のように耳を作ってあげることとできません。しかし、誰かの幸せを願い、笑顔を作ってあげられる、そんな人に私はなりたいです。

